大府当・二番

二

浪 三

内閣文庫
和書
類
號 三二五六九
冊 三九二
架 一五二函 一六

内閣文庫
番號	和 32569	
冊數	394	(285)
函號	152	121

廿六

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

享保二巳年十二月三日

寛永十五寅年 跡目

大御番松平豊前守組 高三百石 吉野長四郎 重経

吉野庄九郎 一組 西尾

小普請

後 次郎兵衛

重経 元禄之後の家督ハ年々

寛文二寅年五月朔日 大御番組入

同年十二月廿三日御加恩二百俵 元高百石 都合

寛文七未年同二月十二日 二条城乃

家督子条々六百俵 白銀十枚 被下

二条ニ備り是より いづれも御恩 備り

寛文十戌年秋 松城の在番 ……

延宝元丑年夏二の丸城の宿直より焼る
延宝四辰年秋坂城の諸請より焼る
〳〵に帰いかく〳〵
延宝五巳年六月廿七日於大坂城死六十二歳

嘉永三戌年二月廿七日
大御番堀越中守組中條相模殿
大御番松平豊前守組 養父 内藤半七郎貞次
殿 孫十郎養
嘉永三戌年十月十二日依願組替大御番中根大隅守組

享保三年戌二月　日

山川横様城管養子
寛永二十未年　月　日誕生
小普請

大御番松平豊前守組　三百石　山川三左衛門貞則

貞則ハ養父横様城管　俗名五十郎
八歳の時より
大猷院殿の御側ニ召出され候の者
かゝりし次さましく眼疾を患へて
後ニ二月人へとめて候御側ニ候を
退しく伺おかさるゝ事ニ候
将軍家御大病の時御命ニ殉し

まうでしに武州豊嶋郡の平塚
明神に祈願の書を捧けて平癒
御側に侍らしむ給ふに御快全に
ましましけるによりて寛永十戌年
九月平塚明神の社を建立し
額にを掛御供養田一反を私に
寄附し十月十五日入佛し右佛
地蔵を建し給ふ
寛永十七庚辰年九月十五日
将軍家王子に遊遥し給ふ時
此明神の社へ寄せ給ひて事の
子細を聞しめし召され明の日菅中に

横検校を召されて拝させたまひ十月
十三日酒井讃岐守忠勝か手迄乃
御白證御内の時横検校を召されて
寄特なる事とおほしめされ武州
豊嶋郡上中里村西ヶ原村にて
二石余を賜り右内二石余ハ平塚
明神の社領少とひて明神に社領
の御朱印を賜ふ寛永二十未年
十一月十四日横検校ハ失せぬされは養子
貞則跡をつきて御代々御朱印を
つゝける
貞則ハ京大坂の郡に遊ひ年を寄く

天和三癸亥年十二月廿九日 浅草御蔵
奉行と為し 後き 御徒と為る
貞享三丙寅年七月六日 関東御代官
元禄八亥年十一月十三日死 五十八才

明暦元未年二月廿八日
大番 松平豊前守組
大番屋代越中守組 後安部居所卯之所
一百俵 大田卯十郎重賢
役料十俵 一年分
其后 願ニ依 二百俵と給ス
重賢ハ京大坂の職ニ依ル事有ニ付 事在ル
寛文十戌年七月八日 請取 百俵 一年
四季 是ニこの二百俵八分 奉る
貞享元子年十二月廿六日 拝入 寄合組
元禄十二卯年十二月六日 致仕
元禄十四巳年三月廿日 死 七十四才

明暦三酉年

明暦三酉年六月　日婚礼

大河内松平豊前守殿娘　曾名　土屋治部左馬西勝

土屋忠兵衛　五百石無足
小普請

西勝京大坂の節ニ御旗ニ本ニ付

延宝二寅年九月廿六日　御鉄炮御箪笥奉行

貞享元子年五月十日　死　年七十歳

万治二亥年三月廿六日　坂本小左衛門重安二男

正保三戌年二月廿八日ゟ和　小書院

大御番松平豊前守組　二百石　坂本百助貞政

貞政弟ニ坂の宗兵衛ニ而年十三歳

寛文十二子年　番入　小栗右近大夫組

元禄二巳年十月廿三日死　四十九歳

万治二亥年七月廿日

大御番松平豊前守組　二百俵　大久保源之丞忠備

千代姫君御広敷番之頭大久保金兵衛忠勝惣領

後五百俵　後金兵衛

寛文元丑年二月廿日　於京二条城乃
守衛ニ付在番之事二百俵を被下
同年冬二条城の守衛ニ付是より
大坂城在七年勤之處又在番に
而駿城ニ付　在勤中
寛文三卯年十二月廿日御加増五百俵
是迄之二百俵ハ返上す

自貞享四卯年十二月九日大御番組に

元禄元辰年十二月廿五日坊職の請ふ

子息ましは御眼白銀拾枚時服二つ給ふ

是よりいつも此恩給あり

元禄四未年十二月廿二日坊職の前よりあり

元禄六酉年十月廿五日

千代姫君の御方へ属せしめ御加恩千石

下野国那須郡の内にしてすへて千五百

五十石

同年十二月廿九日布衣を許さる

元禄十丑年九月廿一日

千代姫君へ附属し奉る

元禄十二卯年八月廿一日廩米五百俵

采地にうつし下野国の内にて

給ふ

同年十二月十日

千代姫君御逝去あまり八

元禄十二卯年十二月廿五日寄合に列す

宝永七寅年十二月十六日致仕す

三百俵を給ふ

享保三戌年十月四日死す七十九歳

万治二己亥年七月廿日

大河内松平豊前守殿　二百俵　宮部八兵衛義宗
大河内伊豆守殿家来ニ而吉保嫡子
後二百八十俵

寛文元丑年十二月十三日願之上二百俵之内
義宗ニ弟大坂の孫兵衛ニ分ヶ遣し
寛文二寅年　月　日願之上百八十俵
是ハ右之二百俵ハ返し上ル

延宝四辰年五月廿日死　四十四歳

万治二亥年七月廿三日

大御番松平豊前守組

大御番土屋丹後守組左馬之丞悴

二百俵　水来広三郎幸好

後二百石　後　八左衛門

寛文元丑年十二月十三日廩米二百俵を賜り

幸好ハ京大坂の宿直に従事す

延宝六午年七月十三日願同二百石

是とその二百俵ハ返しける

貞享二丑年　夏二条城の番衆よりあり

大津御蔵目付を勤めしに病ありて

京に出しに

貞享三寅年三月十三日 於京都死 四十二歳
幸好ヶ體を京都ニて倉居ニ而
西條下京寺町浄運院ニ送ル

寛文三卯年十一月十五日
寛文二寅年十二月九日跡目
西濃紀市郎左衛門養子忠氏
小書院
大御番松平豊前守組 二百石 四十九年 西濃紀彦左衛門養子
延宝四辰年十二月廿七日 御裏御門切手番之頭
養子 弟大坂の定番ニ来て幸年ニ移く
天和二戌年四月廿二日 並御加恩二百俵
元七百石 九年
元禄七戌年五月七日辞入 大保寺番頭組
元禄八亥年十一月廿四日死 七十一歳

寛文三卯年　月　日

小長谷添右衛門時重　男

大御番松平豊前守組　元年十八歳　小普請入　三百俵　小長谷與右衛門和満

和満事大坂の定番ヲ以テ奈ヲ事言〻

延宝三卯年五月十五日　御具足奉行

元禄二巳年四月九日　辞入

組

元禄三午年四月三日　死

寛文三卯年十二月廿九日
大坂御蔵奉行ゟ御勘定ニ罷成 酉廿二歳
大御番松平豊前守組 二百俵 酒河平次正村
改 河次右衛門
元禄十三辰年後大御番平安
其後廩米二百俵を賜り
元禄二巳年十月十二日大御番組頭
元禄四未年二月晦日 二ノ丸仕乃
總之儀ニ付而上八御暇白銀十枚時服
二ツ賜り以後も恩賜有り
元禄六酉年十二月十八日御加恩二百俵凡四百俵
元禄七戌年秋 拓城の儀ニ付て

元禄十四巳年夏二条城の諸備ニ参り
元禄十三辰年十一月廿三日　本苗平岩と
名字を本の形と免さる
同年秋坂城の諸備ニ参り
元禄十六未年夏京都の諸備に参り
宝永三戌年秋坂城の諸備ニ参り
宝永五子年三月四日辞入久貝因幡守組
同年八月二日致仕髪を剃りて一雲と云
享保八卯年八月十二日死

寛文三卯年十二月十九日
大番松平豊前守組　元高濃州ノ組頭石河七左衛門法次惣領
二百俵　石河傳左衛門法勝
寛文四辰年夏廪米二百俵を賜り
同年秋坂城の諸備ニ参り
寛文七未年二月十八日　転役　新番頭遠山十左衛門組

寛文三卯年十二月十九日

大御番松平豊前守組　元大御番組頭逸見八左衛門義指死罷　無之　浪二而儀　猪子吉左衛門一義

一義猪子を殺し候とする八毎八
猪子治左衛門一日ヲ女ナル故猪子を
殺し候とし旦俗忠当年に生き
候もの八なり

一義ハ父今年寛文三卯年四月廿三日
死去いたし兼て致方有の候故也八以ハ
致方有之大御番ニ可被

同年十二月十二日いよ〱病氣ニ付
さり乍定之遣候へともうち二百俵を被下
一義高大坂の定番子并ニ年寄ニ年若く
延宝三卯年八月十四日死年七十歳

寛文三卯年十二月十九日
大御番松平豊前守組
大御番番頭伊賀守組相勤候跡式被下
二百俵 森本助十郎定武
後ニ三百石 後 市右衛門
寛文五巳年十二月十五日廣米二百俵を
賜ル
定武ニ末子大坂の定番ニ而年寄ニ年若く
元禄十三辰年二月廿七日 大御番組頭
同年六月廿八日於坂坂の諸事ニ而年八
御服白銀拾枚時服二を賜ル是より
以て御恩賜候

元禄十二己卯年十二月廿二日御加恩二百石
元高百石
元禄十六未年夏二条城の御番に参り
宝永三戌年秋大坂城の御番に参り
宝永六丑年夏二条城の御番に参り
正徳元卯年四月八日隠居入松平主計頭組
享保三戌年二月十七日死八十二歳

寛文三卯年十二月廿九日
大御番松平豊前守組
大御番松平半右衛門組新七郎忠久嫡子
二百俵　本多主馬忠盛
改　政平
寛文四辰年春より秋大坂城の御番に
参り六屋敷二百俵と成り
忠盛二条大坂の御番に参り年数久しく
延宝元丑年十二月十六日父失めまし
右家の料同しく是ハ跡をも不頼
延宝六午年四月八日死四十一歳

寛文三卯年十二月十九日

大御番松平豊前守組　二百俵　山角源兵衛定和

大御番中根日向守組文右衛門定富忰

後　六郎右衛門

右者廩米二百俵を賜ひ

定和ハ大坂の倉廩より米を事に寄て

貞享元子年十二月十二日

弘文院
任　林春常信篤

寛文三卯年十二月十九日

大御番松平豊前守組 長井喜左衛門吉章

大御番戸田伯耆守組西尾隼人吉勝忠ハ

後 知行百六石　後 又左衛門

寛文四辰年十二月十日いまだ部屋住より内父か遺跡知行百六石を賜[illegible]

賜る

寛文六午年二月晦日 死 二十三歳

寛文三卯年十二月十九日

大御番[illegible]組ゟ[illegible]勝忠氏

大御番松平豊前守組

二百俵
後三百俵 石川[illegible]春

後 [illegible]

寛文四辰年 長屋家来二百俵を給り
四年秋 松城の留守居より来り まかり
来る石川の家来より来り 勤て
寛文十二子年十二月十二日 添目 三百俵
足しの 二百俵六 加へしする
元禄十二卯年閏九月十日 御赦にして
家の十一役を勤る

元禄十三辰年五月晦日死　享年六十才

寛文三卯年十二月十九日

大御番松平豊前守組

廣戸傳九郎

寛文四辰年五月十八日

慶安二己丑年　月　日御判

近藤十左衛門之養子

小普請

大御番　松平豊前守組　二百俵　近藤三郎左衛門

後二百石

右同　實ハ八右衛門之子市川みつく　三之遺跡を継ぐ

右同　弟大坂の御番ニ而主命ニ而

死去

天和元酉年十月廿三日實父八右衛門病死

遺跡二百石を継　是迄の二百俵ハ返上する

貞享三丙寅年　十二月十九日　表御納戸

寛文七未年十二月廿五日

御右奉行中清孫右衛門盛政在世之砌

大御番松平豊前守組　二百俵　中清七郎右衛門盛忠

後　孫右衛門

寛文九酉年十二月廿三日病死ニ付二百俵之内嫡子

盛忠弟太夫の跡式清よ系ヲ年　二度

延宝三卯年九月十一日　父兵ヘ申達し候ヘ

不の料ハしらヘ八　遺跡を許サ

天和元酉年四月廿五日大御番組入

同年十二月廿三日御加恩二百俵都合四百俵

天和二戌年　月　日於城の跡式清よ

弟也八陸服白銀十枚時服二を賜る
其后も時恩賜あり
貞享二丑年夏二条城の勤番をつとむ
貞享三寅年九月廿八日御目見
同日御加恩百石元百石
同年十二月廿八日布衣着を許さる
貞享四卯年三月廿一日御先鉄炮頭
宝永元申年八月十一日御役を免さる
小普請井戸対馬守組に入
宝永三戌年四月廿九日死年六十歳

寛文七未年十二月廿日
大御番松平豊前守組　二百俵　松平三郎兵衛忠政
松平九郎左衛門忠貞二男
御小性組大久保山城守組与平兵衛義養子
後　小兵衛
寛文九酉年十二月廿日廩米二百俵を
賜りしかしめ浮猾せしによりて
石出させし今年出事に及ふ
忠政実父大坂の勤番にて来る事なく
元禄二巳年十二月五日寄合入仙石因幡守組
元禄九子年八月廿六日死

寛文七未年十二月廿一日

逸見八左衛門義持次男
母書院番酒井大隅組八左衛門義實女

大御番松平豊前守組　二百俵　逸見七左衛門義雅

寛文九酉年十二月廿五日廣敷番頭　二百俵下置
義雅元来大坂の節より病身ニ付
貞享三寅年十月三日隠居家督相続
兼つき伝えとなり
元禄四未年三月　日叙の上として隠居
奉行を免さる

元禄五申年三月八日死

寛文七未年十二月廿日
大番頭松平豊前守組　二百俵　富田三左衛門
御弓奉行富田加賀守西丸忠所
改　与左衛門　二男主膳
寛文九酉年十二月廿日廩米二百俵と
號し
西丸京大坂の新番衆に参る
延宝元丑年十二月廿日　従新御番　番方千年佐倉組

寛文七未年十二月廿五日

大御番三木平兵衛組御番衆西郷甚兵衛

大御番松平豊前守組　二百俵　小濱源兵衛繁之

寛文五巳年十二月廿五日廩米二百俵下賜
繁之去る未年大坂の宿所において乱心
其後相番大番御番衆をたちまちに
討果し其身も自害せしむ

貞享元子年八月廿九日　於配所死

繁之か此事によりて同年十二月廿五日
父西郷八丈島に流刑に処せらるまて

千石を奪去る是実家にて
家既絶

寛文八申年
大番松平豊前守組　小普請　二百俵　久保三平勝久　但久保帯刀善勝長男
其後廩米二百俵を賜り
勝久京大坂の寄並に参り奉る
扶く
延宝八申年二月十二日於二条城在番病死
勝久か嫡子出来通千本西石入る二百
花光寺に送る

寛文十戌年十二月晦日　三浦清左衛門義房隠居

寛文十一年　月　日跡目　小普請

大御番松平豊前守組　三百石　一　三浦甚之助義方

義方事大坂在番に而

延宝四辰年七月十日死

寛文十戌年　月　日

小濱彦右衛門要人惣領
伊豫国御代官
大御番松平豊前守組（御番）　二番　小濱彦右衛門正之

正之事大坂の宗正に与する事有て
貞享元子年八月廿九日従弟小濱御庄の
兩親流刑に處せらる重八志ありて内
追而親らもて免さる

貞享三寅年六月十二日拝入内藤出羽守組
元禄九子年七月二日致仕髪を剃りて
祖休といふ

宝永元申年三月廿二日死 八十六歳

寛文十三丑年六月廿六日

若林三平某惣領

小普請

大御番武田織部手組 父名 若林左兵衛某

左兵衛某事大坂の宿直ニ参り申事

候ゝ

貞享三寅年十二月十九日 御腰物奉行

寛文十二子年五月廿六日

新御番神尾市左衛門組[illegible]　書判

大御番武田織部正組　二百俵　呉服市郎左衛門

寛文十二子年六月廿六日

大御番中根日向守組甚左衛門重久惣領

大御番武田越前守組　二百俵　小尾市之助祐長

後　市左衛門

其後廩米二百俵を賜ふ

父先立しかハ

本の料はしりそけ遺跡を継かす

祐長亦大坂の宿直に八年を事らる

元禄二巳年六月十日大御番書組頭

同年同月廿日坂城の詰衆を奉せ

御暇白銀廿枚時服二を賜ふ此後も許

恩賜之
元禄三午年十二月廿六日御加恩二百俵 凡四百俵
元禄六酉年夏二条城の御番ニ参ル
元禄八亥年秋 松城の請取ニ参ル
元禄十丑年十二月二日死 六十九歳

寛文十二子年五月廿六日
大御番武田織部組
大御番酒井伊豫守組 松平丹後守
二百俵 石原主水信富
後四百七十石 改 四百石高
其後 廣敷番 二百俵之儘
信富京大坂の御番ニ参り候ニ付
元禄三午年 月 日 隠居 四百七十石
其上の 二百俵ハ返上 奉ル
元禄十一寅年 八月九日 大坂御金奉行
同年十二月廿五日御暇ニ而一枚御服ニ而拝領
元禄十六未年十月十五日 死去ニ参ル

浮竭し大織冠守を勤めける
同年十二月二日御暇并金子拝賜候にと
帰り
宝永三戌年十二月廿日於大坂死同所葬

寛文十二子年五月廿六日
大御番武田越前守組
大御番戸田備後守組佐久間安藝守組
二百俵 後七百石 佐脇傳四郎高氏
後 備後
其後扇書末二百俵を賜り
高氏事大坂の番並に多年勤候ゆへ
貞享元子年七月十二日諸目七百石
先之の二百俵を返し奉る
辞入 組
正徳元卯年十月六日死

延宝元丑年
寛文十三年　月　日諱目
大御書武田越前守絶　松風権右衛門正行忠死
小普請
二百石　松風右衛門正信
後　市右衛門
正信京大坂の宮出了　条々年
度々
元禄六酉年五月十九日元方御納戸

国立公文書館
National Archives of Japan

延宝元丑年十二月廿二日
同五巳年十二月　日晦日
大御番武田織部守組　久保七左衛門勝清養子
実ハ御書院戸田伯耆守組
二百石　久保七左衛門勝忠
勝忠ニ而大坂の御番ニ而卒ス
貞享元子年十二月十二日　元方御納戸

延宝元丑年五月廿六日

寛文二寅年　月　日除目

大御番武田織部組　三百石　金田八郎右衛門正辰

金田平之丞正長惣領

中書信

同三年夏二条城の番之節ニ参ル

延宝四辰年六月十七日死　二十六歳

延宝元丑年十二月廿二日
太田三郎右衛門所蔵忠臣
書付

明暦三酉年　月　日改

右御書武田殿被下置候三百俵　太田三左衛門正隆
改　三郎左衛門

同年　長二条城之御番被仰付

延宝五巳年十二月十三日死　二十八歳

延宝四辰年四月十日

延宝元丑年十月廿五日家督

小栗忠左衛門正種惣領

小普請板倉市正組

大御番武田織部組　三百俵　元禄年中

小栗新左衛門正盛

改忠左衛門

正盛二男大坂の役高千石[illegible]三百石

貞享元子年六月廿六日死

延宝五巳年五月十日

寛文六午年七月十一日跡目

長井又左衛門吉章養子
実ハ喜多倅

大御番武田越前守組 五百石 長井金左衛門昌廷

後 又三郎 又左衛門

昌廷京大坂の御金蔵え参り候年

不知

元禄九子年七月五日 新御番牧野求三郎組

延宝五巳年五月十日

寛文十二子年七月十二日家督

小浜源左衛門某惣領

小普請

大御番武田讃岐守組 二百俵 小浜伊兵衛某（改源左衛門）

伊兵衛某二男大坂の家臣に養子之事

座候

死

延宝六午年三月廿九日
日下部三之丞宗忠卒

寛文三卯年十二月廿九日 亦同日
小普請
大御番武田織部守組 五百石 日下部市郎左衛門宗春
改 三之丞

其後京大坂の勤ニ請ニ来る

貞享元子年八月十八日新御番仙石次左衛門組

延宝六午年三月十九日

新番頭能勢市十郎組ゟ大番へ西丸御附所

大番頭武田織部守組　二百俵　廣之仁左衛門行寛

延宝八申年三月十五日廩米二百俵を賜ふ

天和二戌年秋坂塚の詰番ニ参る

貞享元子年十一月十五日依病死二十五歳

延宝六午年三月廿九日

大御番軍大隅守組高木右馬元明惣領

大御番武田織部守組　二百俵　高村弥次郎元信

延宝八申年三月廿六日　廩米二百俵を
賜る

元信京大坂の宿直てより参る

貞享三寅年十一月廿七日　任転大御番組沢

元禄元辰年十二月十二日　拝職の陪膳により
禁裏へ御使白銀十枚時服二を賜り
是より以川も出恩賜り

元禄四未年夏二条城の定番に参る
元禄五申年七月廿一日跡目七百五十石
四年余是迄の二百俵ハ返上す
元禄七戌年秋坂城の詰番に参る
元禄十丑年夏二条城の定番に参る
元禄十一寅年二月下総国相馬郡
蔵谷村の采地十五石九斗余の所
御用あるよしにて差上る代りとして
上総国武射郡今尾村にて相渡諸
五十二石九斗二升六合五勺を賜る
元禄十三辰年秋坂城の詰番に参る
元禄十六未年夏二条城の詰番に参る

宝永三戌年六月廿六日辞入道周備守細
享保三戌年七月廿日死六十四歳

延宝六午年三月廿九日

大御番武田越前守組

大御番酒井[illegible]守組中[illegible]嶋保儀養子

二百俵 服部十左衛門保利

後三百俵

改 [illegible]

延宝八申年三月廿五日廩米二百俵を給ふ

保利京大坂の宿所ニて[illegible]

宝永二酉年十月十九日臨月二百俵ニ加への

三百俵ハ返し奉る

正徳三巳年十一月十二日 拝入大番[illegible]組

享保三戌年四月九日 死 六十一歳

延宝六午年三月廿九日

大御番成田越前守組　大御番堀田對馬守組二番未ゟ信龍養父

三百俵　竹田権兵衛信澄　改 平右衛門 与右衛門

三百石廩米二百俵之積

貞享元子年八月十八日依願新御番水野藤右衛門組

延宝六午年三月廿九日

石川河内代官 柘植伝兵衛家督遺跡

大御番 武田越前守組 二百俵 柘植伝兵衛 利清

其后 廩米二百俵と被下

利清 京大坂の蔵奉行ニ差登る

貞享元子年八月廿八日 任郡代 新御番 松平右近将監組

延宝六午年三月廿九日

一 御書 武田越前守組　御材木奉行小林六郎左衛門宗信惣領

二百之　小林三之丞宗去

後三百俵　後 六郎左衛門

延宝七未年七月九日 いまた二廩米を賜り

さきの父遺跡二百俵を賜る

宗去京大坂の御蔵ニ赴く年 二茂

元禄元辰年十一月廿一日 番入大久保玄蕃頭組

元禄九子年十二月廿五日 新御番本多

言厳組ニ入

延宝七未年十二月三日

寛文四辰年十二月十日御目

柳沢八郎右衛門吉次養子
小普請大久保山城守組

大御番武田越前守組 三百俵 柳沢八郎右衛門信尹

後 豊後守
備後守

信尹事大坂の在番ニ而卒ス年 三十歳

元禄三午年九月廿五日大御番組入

元禄四未年十二月晦日二条城御番衆中
為其六御服白銀拾枚時服二ツ賜ル
是より以前も御恩賜り

元禄六酉年十二月十八日御加恩百俵元高四百俵

元禄七戌年新古城の経営によ参り
元禄十丑年表二重城の普請ニ参り
元禄十三辰年二月十五日御称号
同年十二月廿一日布衣を免さる
同年同月廿二日御加恩二百俵
元禄十四巳年三月廩米六百俵を采地ニ
改られ武州多摩郡幡羅郡
の内ニて六百石下さる
元禄十六未年三月十二日御目見
宝永三戌年十二月廿五日御加恩二百石
武蔵国多摩郡下柚木村相模国
愛甲郡林村ニて下されて凡八百石

宝永四亥年十二月朔日御作事奉行
同年同月二日天主敷を務むへき
旨仰せ之命ありしま
宝永五子年三月十九日去し八日
禁裏　院中営造として造りを
らるし御用を命せられま
宝永六丑年六月廿三日
禁裏　院中御造営の様を命を
らる　同月廿八日御雅楽金五枚時服三
羽織を賜り　又よりて采報ゟ参り
新造の
御所を拝みしみして　六月廿八日御さく

済渡し
同年十二月十六日
禁裏　院中を造りたてまつる御用を
勤めて労ありとて時服三を賜る
宝永七寅年五月廿二日三縁山
清揚廟を修したてまつり一荘厳をつくし也
仰おさる也
同年閏八月十二日時服
清揚廟の御棟あらため八数寄仰出
さるゝ豊後守と改
同年九月十六日
清揚廟を造りたてまつる御用に労あり

ありて黄金枚三時服三羽織を賜る
正徳元卯年四月十三日阿部豊後守正喬
相続をさけられ備後守と改
正徳二辰年四月二日東叡山
長昌院主の御仏殿を修したてまつり
御用を命せらるゝ也
同年十一月廿二日紅葉山に
文昭廟を造りたてまつる御用を命せ
られき
同年十二月廿八日
長昌廟を修したてまつる御用を勤めて
労ありて黄金枚三時服三羽織を賜る

正徳四午年二月十三日紅葉山
新御廟を造らせて労ありしとて
黄金五枚時服三を賜る
正徳五未年二月廿二日 天主教改を
免さる
享保二酉年七月廿七日西城の御殿を
修造らるゝ時御用を命せられき
享保三戌年二月十二日西城を修造
らるゝ御用を勤めて労ありしとて
黄金三枚時服三羽織を賜る
同年閏十月九日山里の御殿を修造
らるゝ御用を勤めて労ありしとて
時服三を賜る
享保四亥年四月十九日御靈屋を
造らるゝ御用を勤めて労ありし
かハ時服三を賜る
同年十月廿八日朝鮮の使来りし時
所々を修造らるゝ御用を勤め
しかハ時服三を賜る
享保六丑年四月廿七日東叡山
大猷廟の御用を勤めて労ありしとの
修を葺かれしに別て時服三を賜る
同年十月十二日東叡山の本坊を
造らせらるゝ御用を命せられき

享保七寅年七月二日出度の事に
骨折りとして時服三を賜る
享保九辰年正月十一日御鎗奉行
同年七月十六日卒年六十六歳

天和元酉年十二月廿六日
大御番武田織部守組
松波梶平重則惣領
小普請
高千石 松波梶平重周

天和元酉年二月廿六日
小笠原内蔵助景経養子
延宝三卯年七月廿日病死
小笠原信濃　松浦内蔵允組
大御番戸田越前守組　壹岩　小笠原源兵衛貞晃
改　十六歳
貞晃亡之跡の宗旨ニ而奉公仕
元禄六酉年十二月十五日　大御番組頭
元禄七戌年六月廿九日御眼白銀拾枚
此時三ヶ年ニ付て拾挙ニ而勤候ニ付
以上も拝恩候ニ
元禄十五午年夏二ヶ年の…より有る
元禄十二辰年六月廿九日　寄合入　大久保

土屋数馬組
宝永三戌年三月六日死罷在来

天和元酉年二月廿六日
佐野九右衛門政利惣領
寛文十戌年十二月十日済
大御番武田越前守組 小普請信
二百五十石 佐野九右衛門政国
天和二戌年秋於拾城の宿直二八手く
貞享元子年八月十八日新番仙石次左衛門組

天和元酉年十二月廿六日

延宝三卯年十二月十一日御目見

猪子若狭守一義惣領

御書院戸田備後守組

大御番戸田織部正組　三百俵　猪子左太夫貞義

改　内蔵助

貞義ハ実ハ逸見太郎左衛門次男ニ而

猪子之跡ヲ継ク　武之丞

天和三亥年十二月十日番入　戸田但馬守組

貞享元子年二月十四日死　二十九歳

天和元酉年十二月廿六日

吉田小兵衛　忠辰

大御番武田織部守組
二百俵　吉田次郎左衛門某

天和元酉年十二月廿六日

延宝六午年　月　日譲　奥津甚左衛門正勝惣領
小普請

大御番武田対馬守組　二百俵　奥津十三郎忠常
改　甚左衛門

忠常亦大坂の[illegible]ニ参り

元禄四未年三月十八日死

国立公文書館
National Archives of Japan

天和二戌年六月三日

延宝八申年九月七日跡目

大御番武田織部守組　二百俵　久保源十郎勝成

久保三十郎勝久養子

小普請大久保山城守組

後 西沢左馬

勝成家來大坂の宿所にて寄子等争論

享保十一午年三月廿七日火之番府将の者

歩行勝手之勤

享保十九寅年七月十一日老辞賜黄金二枚入寺去出勤之死

享保二十卯年十二月廿日死

天和二戌年六月三日

延宝六午年十一月十二日婿養

大御番戸田越前守組

大御番三宅左近西隆忠原

小普請松平縫殿頭組

二百俵　大御番依田七郎資明

改　四郎之丞

資明養子大坂の……事無く

元禄十四巳年十一月二日勤入大久保主膳正組

享保四亥年八月二日為伊丹……

享保九辰年十一月十五日致仕一眠と云

享保十五戌年十二月晦日死六十九歳

天和三亥年六月廿四日

寛文十戌年七月八日父部屋住料譲り

柳沢長九郎信安惣領

小普請大久保佐渡守組

大御番武田織部守組　二百五十俵　柳沢孫之丞時憲

後四百五十俵

時憲　元大坂の宿直ゟ来る

貞享二丑年七月廿二日祖父孫兵衛安吉

致仕し候迄ハ千家督四百二十俵之旧る

元禄二巳年十月廿二日　辞　入大久保玄蕃頭組

元禄十丑年十二月十九日死　二十八歳

天和三亥年六月廿九日
浅羽治右衛門貞昌悴
天和二戌年十二月十八日家督
小普請松浦内蔵允組
大御番武田織部手組　三百俵　浅羽治右衛門貞常
後　文右衛門
貞享二丑年夏二条城ニ而病死
絶
貞享三寅年十二月十九日元方御納戸

天和三癸亥年閏五月廿三日

延宝七己未年　月　日請

大御番武田越前守組　大谷新左衛門吉政忽次　中番隠居

二百俵　大谷長兵衛重行

後　伝左衛門

貞享元子年八月廿九日於書四郎兵衛と
云者重行か宅にて薬研にて口論のうへ
刃傷に及ひ重行家を出奔しく
三ヶ所深く疵カるよ

貞享元子年八月廿九日死

重行を四郎兵衛討んと追かけしに
重行か背中を疵付時 その

庭にてすへやうに深見と対面し
て時吉重科も深見を頼みまいらする
命をも助かりけり　重ね願ふ
あつし庸米二百俵を賜ひまいらする身
忠三郎時吉兄の仇をうたんとの
さすか討留し事天晴の働なりしと
仰有て時吉を可召出旨仰を蒙り
しかし深見かくし事も不叶
終に時吉命あやうきまのそと
ころなる所をたすかり又浪人
近藤源三郎か智勇与三郎を頼みて
まつ時吉し　時吉兄の遺跡代

与三郎に頼みし事ともあつき忠
臣仰付　是時吉に此事まさに兄の遺跡を継かるべし
終に時吉兄の仇八三月に討て
与三郎時勝に遺跡として百俵叶を
備へ時吉の武名を顕しけり

天和三亥年九月廿八日

大御番武田織部守組

大坂御金奉行八木彦左衛門勝忠が子

二百俵 後三百俵 八木甚三郎正意 改十兵衛

同日御蔵米二百俵を賜ふ

正意前ゟ大坂の定番与力を勤む

元禄十五年四月廿九日加増三百俵是迄の

二百俵ハ返し奉る

元禄十五年四月廿九日大坂御金奉行

同年閏八月二日御暇黄金一枚時服二を

賜る
正徳三巳年六月七日死

天和三亥年九月廿五日
大御番武田織部組　大坂御金奉行間宮甚左衛門信秀悴
二百俵　間宮角兵衛信明　後三百俵
改　猪右衛門
播磨守
同日廩米二百俵を賜る
信明京大坂の宿直すゑる
元禄三午年十二月十二日　同日三百俵
是までの二百俵ハ返し奉る
元禄五申年十二月九日　新御番大久保伊豫守組

元和三丁巳年九月廿三日

大番青武田織部組

大番青武田織部組御手前宝恩恵所

二百俵　大番深尾清平

同年廩米二百俵を賜ふ

清平　京大坂の家に御扶持

元禄四辛未年三月十日

任新宅死

天和三亥年九月十七日

大御番武田越前守組 二百俵 河村喜六郎信昌 家十郎信勝老衰

同日廩米二百俵を賜ふ

信昌京大坂の宿番ニ來ル

元禄二巳年十二月廿八日 於彼 任 死 三十一歳

信昌の子無吉郎某父の遺跡を

賜ふ元禄八亥年八月九日糸けあ六

其料二百俵を收めらる

貞享元子年十二月十八日
村上左馬清義二男惣兵衛
天和三亥年　月　日御目見
小普請内藤出羽守組
大御番岡部丹波守組　十二歳　村上宇右衛門清光
清光　京大坂の勤番之節之事
同く
元禄十二己年九月七日死

貞享元子年十二月廿八日

天和三亥年七月晦日誕

大御番黒部丹波守組

黒部八右衛門貞之丞忠子

小普請内藤安房守組

黒儀　黒部八右衛門　西明

西丸二年大坂の勤番相勤

宝永三戌年六月廿五日大御番組頭

同年七月廿五日於城の普請ニ付御褒美

御服白銀拾枚被下之候

以上右之通御座候

宝永六丑年夏二条城の在番相勤

正徳二辰年秋於城の在番相勤

正徳四午年　夏二条城の定番を務め
享保三戌年　秋坂城の詰番を務め
此年夏の内於大坂棚余次と云
之大坂城をお暇し自害せし
事あり　此の年京都に帰りしに
御沙汰ありて　諸国を巡りしまゝ
享保四亥年十月九日　大久保佐渡守
常春組頭の面々にいさゝか　同年
大坂番某掛を勤めし於大坂棚余
之ニ年次と云者出奔し自害せし事
細川殿入り不届年の事ゆゑ
御もの事急度御役を奉号

小普請より二百俵を奉寺
舘居すべしと作者内忠女是就入
享保五子年三月六日舘居を免さる
享保八卯年番頭張門猿の郎御用
あらしにて帰り本郷町
表通にて代りを務る
享保十二未年八月三日就任堅を剃て
破にと云
享保十七子年二月十七日死　六十七歳

貞享元子年十二月十八日

窪田助太夫盛勝末子

小普請内藤出羽守組

貞享元子年七月十九日家督

大御番石川丹波守組　二百俵　窪田助太夫勝詮

勝詮、事大坂の陣ニ備ハ参り

婿入大久保玄蕃組

宝永二酉年三月十七日死

貞享元子年十二月十八日
南條小左衛門隆友嫡孫養子
南條左京亮隆重忠次
寛文八申年十二月廿八日父跡并役料跡目
常憲院御名出羽守組
大御番留品部丹波守組
二百俵 南條中務隆屋
後 三百俵

隆屋京大坂の節御承り事有之く
元禄四未年 祖父之養祖父しあり
元禄五申年五月廿日祖父隆友失而
七月廿二日祖父之遺跡ハ御金奉行を
勤めし時滞金銀有之によりて様々
遺跡の御沙汰よ相及候仰出されし

其年十二月廿六日より元禄十丑年十二月
十日までに借金の返納をゆるされしかハ
元禄十二卯年十二月九日借用三百俵是より
二百俵ハ返し奉る
宝永元申年十月六日大御番組に入
同年十二月十二日御加恩二百石又其乃
廩米三百俵も采地にかへ給ハり
上総国市原郡五所村椎津村にて
すべて五百石
宝永三戌年七月廿八日坂城の宿直に
参りしとき御服白銀十枚時服二を賜ふ
そのうへいつも御恩賜ふ

宝永六丑年夏二条城の宿直に参る
正徳二辰年秋坂城の勤番に参る
正徳五未年夏二条城の勤番に参る
享保三戌年秋坂城の勤番に参る
明の亥年七月十二日桐間番頭役をと
ゞめし柳原御手伝出勤し於秋
宿直をとめられしに柳原の事
御旨にかなひす謹慎を免し
かへす追こめられき
享保四亥年十月十九日同役一統大久保
佐渡守常春朝臣の邸に召されて
去年の時柳原御手伝の事を忌し

御目見えいたし御役をも勤まし
小普請よりつとめ享和二石を勤いたし
小普請但 安芸守嫡子死とある
享保八卯年十二月六日 年迄 東所の
火事にてよし 居邸 類焼にかつき
享保十一午年十二月廿一日 年始 出仕
あるべき事と見ゆる
元文四未年八月十九日 致仕 元服しと云
寛保二戌年三月十三日死 七十四歳

貞享元子年十二月廿八日
貞享元子年七月十二日跡目
大御番 曾我丹波守組
中根権六郎 信政惣領
小普請 曾我和泉守組
当年二十
八百石
中根宇右衛門 安雄
元禄五申年十二月廿八日
安雄 元年大坂の在番ニ年 三度
元禄五申年十二月廿八日 御裏御門切手番之頭
元禄十三辰年十月廿七日 御広敷番之頭
享保元申年二月十一日 寄合入 大久保淡路守組
享保四亥年八月二日 為保丹羽左衛門支配
享保七寅年十二月廿三日 致仕 安休と云
享保十二未年四月廿九日死 八十二歳

貞享元甲子年十二月廿九日
伊吹三右衛門重蔵男子

延宝八庚申年九月廿七日叙目
小嶋清吉養子故有之但

大御番北条丹波守組番三右衛門 伊吹三右衛門重彦

重彦京大坂の定番を勤る

元禄四辛未年八月廿四日於二条在番死 年三十六歳

重彦か骸を京北野浄泉寺に葬る

乾宗院と號す

貞享元子年十二月十八日 坂紀次之儀右武州

延宝元丑年七月十一日端月 出雲信濃内膳出羽守組

大御番黒部丹波守組 二字御儀 坂紀助五郎 出羽 段五郎太夫

元禄十四巳年九月十二日 出雲信濃方

出羽弟子坂の宮本に令寄了辞し候

元禄十六未年十二月廿一日 許成の

地面取払れ 破損せし

御宮御佛殿と修せらるゝ御用を

命ありしを

宝永元申年十二月廿八日 去年

地震ゆへ破損せし所々
郭門等を造りかへし其労
ほうして黄金拾枚時服三を賜る
宝永六丑年八月廿一日死 六十四歳

貞享元子年十二月十八日
貞享元子年七月廿九日跡目
大御番 新丹波守組 二百石 玉村源蔵義久
本村右馬右房養子
小普請 松浦内蔵允組
義久ハ元禄の比に余る年
ほく〱
宝永元申年 寄合入 采陳周防守組
宝永四亥年二月七日死 五十四歳

貞享元子年十二月十八日
惣領 丹羽五郎左衛門利好惣領
小姓組 松浦内蔵允組

天和三亥年七月十二日跡目
大御番 兵部丹波守組　二百五十石 丹羽五郎左衛門利雄
内五十俵　後 若狭守

元禄十三辰年二月廿三日 大御番組頭

利雄第六代の家並に第一番ニ務く
同年十二月十八日 拝領の諸儀を兼八
御服 白銀十枚 附服二つ 賜り同しく
此恩賜也

元禄十四巳年十二月十二日 御加恩 百俵
元四百五十石

元禄十六未年夏二条城の定番に移り
宝永元申年九月廿八日御目付
同年十二月十二日御加恩百石元の五百石右
足とともに三百石俵と采地になをさる
上総国の内にをいてたまはる
同年同月十八日布衣着を免さる
宝永五子年十二月十四日大嘗会御目付
仰付らるゝ去る明の丑年正月に
到りて御代替の事によりて
江戸に止まる
宝永六丑年十二月廿日
新院崩御御何をもて御用として

京都に赴くの節に暇を賜ふ
御前にめされて仰を蒙り時服
ぬきて黄金五枚を賜り是より
京都にありて御用を務め明る
寅年三月廿八日帰て御礼す
正徳元卯年二月十八日駿府城の
石垣の修をしらへて御用を命せらる
三月晦日御暇黄金三枚時服二羽織を
賜り是より駿府に赴く
正徳二辰年選りありて家に帰り
正月廿八日御礼し此度の賞として
あらためて黄金五枚時服二羽織を賜る

正徳四年八月廿一日 銀吟味ありし
御用を命せらる
同年十月朔日 銀吟味ありし御用
事終るにより其の作を賞して同月
十九日 采地を遠国にて五百石六物書料
黄金を賜ひ又御服黄金を賜ふ
時服二領羽織を賜ひ御用を勤めて
労ありし賞なり
同年十二月廿一日 金銀吟味の御用を
命せらる
正徳四年十二月廿八日 采く遠国御用を
勤めて労ありて御加恩二百石遠江国の
うちにてあはせて凡七百石
正徳五年十二月十九日 金銀吟味の
御用小普請にありて
享保二年二月三日 御普請奉行
同年六月九日 神田橋 俎橋を
造りし御用を命せらる
同年十二月廿一日 勘定吟味役仰出され西丸留守居
と改む
享保四年十二月廿八日 御前に召され
し事ありて籠居すへしと
仰出され 明の五年 四月十日
免さる

享保八卯年二月十一日辞寄合ニ列す
享保十七子年閏五月十二日致仕庸悟と云
寛保元酉年三月十一日卒

貞享元子年十二月十八日
諱同源右衛門惟次養子
貞享元子年七月十八日跡目
小普請松浦内蔵允組
大御番高級丹後守組　二百俵　諱同喜八郎惟元
惟元京大坂の宿直を勤る事十二度
元禄二巳年二月十三日辞入大久保玄蕃頭組
元禄四未年二月田家代官の勤所
年所の郡御用あるよしにて
勤めさせしこて小普請
石余行所かへし九百三十俵乃
地を賜る

享保四亥年八月二日為今田周防守与力死
享保九辰年八月十六日死 六十八歳

貞享三寅年十二月十九日
延宝五巳年八月廿二日於神田誕生
大御番高木丹波守組 元禄九子九
八百石 美濃部勘右衛門武清
段十右衛門
武清弟大坂の
正徳四午年四月七日稀入松平主計頭組
正徳五未年十二月十一日致仕
享保十二未年六月廿日死 七十四歳

貞享三寅年十二月廿九日

寛文二寅年新田御蔵米百二十俵之内 松平勘右衛門重政惣領
百俵被下

大御番[illegible]丹後守組 元新田蔵 小普請
置候 松平勘右衛門正義
後 十五歳
御番入

正義 元大坂の宮番ゟ参り年三度

元禄九子年七月廿四日 御小納戸

宝永六丑年四月十五日 一統免されて
寄合ニ列す

享保四亥年十二月十二日

天英院君の御用人

享保九辰年十二月十八日叙爵仰
出され備後守と改
享保十六亥年二月十六日老辞時服三を
賜り寄合に列す
同年八月廿日致仕を許され三百俵を賜る
享保十八丑年七月廿一日卒七十九歳

貞享三寅年十二月十九日
延宝五巳年神田御殿に於て生
長山久太夫直政二男
御母ハ[illegible]
大御書院番丹後守組　四百俵　長山彦右衛門直依
直依ハ大坂の富豪に来て年ひさしく
宝永三戌年秋坂城の請傳に来り
明の年病ひおもく先たちのため
御城を出しかり
宝永三戌年七月十二日於大坂町宿死
直依か骸を大坂の長安寺に送る

貞享丁卯年五月十八日

慶安辛卯年十月八日於田舘ニ出生

大御番曾我丹波守組　元西丸

松波梶平重政次男

小普請酒井能登守組

三百俵　松波六郎左衛門重貞

重貞儀大坂の御番ゟ寅年ニ成

元禄七戌年六月六日番入松平[illegible]組

宝永二酉年五月二日死九十[illegible]歳

貞享四丁卯年十二月十八日

天和元辛酉年二月廿六日ヨリ出仕

大御番阿部丹波守組

平岩佐右衛門正包二男

小普請松浦内蔵允組

元桐間番

三百俵　平岩清兵衛正友

後　甚五郎

正友高坂の宮ニ而年々勤く

正徳二辰年四月九日番入大久保淡路守組

享保四亥年八月二日為伊丹兵左衛門支配

享保六丑年十二月二日致仕　髪を剃ほとく

号斗しと云

元文三午年十月九日死　八十二歳

自貞享四卯年正月十八日

延宝八申年二月廿六日於神田御殿御目

二百俵并御合力米被下置百五十俵不知

大御番青山丹波守組

元禄元辰　小普請　内藤式部少輔組

花井久之丞　定吉惣領

二百俵　花井勘右衛門　定吉

定吉京大坂の節之儀に付奉存候

元禄十五午年閏八月三日　番入水野長門守組

享保四亥年八月二日寄合酒井大学頭支配

同年十二月廿日死

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan